



雷聲

壬子之日記

壬子
八月廿七日
九月十日
夕
全

特別
A5
6581
29



5
6581
29

八月廿七日

保泉羊秋仙在書次

高利

其三十三

与
此
書
之
後
也

一
軍
十
丁
後
運
少
也

之
後
也

之
後
也



右

ふたし

杜若のあやも交の家はあはれ

右

ふたし

世乃路の標はさういふ家

右

具三十四

燻毛

ふたし

伝はるる指しはさういふ家

ふたし

事さういふ家

ふたし

陸奥の部とてはさういふ家

ふたし

西の角はさういふ家

石

ふ
ちしり

之船ヲ船歌をも 後 居りく

石

けしげのついでに 百を及て半はち

しりていしすし 改まるるる

けし末のついでに けしりるるを けしりるるを けしりるるを
入来月を 惜め持て けしりるるを けしりるるを けしりるるを

けしりるるのついでに けしりるるのついでに けしりるるのついでに
甲しりるるのついでに けしりるるのついでに けしりるるのついでに
けしりるるのついでに けしりるるのついでに けしりるるのついでに

南人乃 けしりるるのついでに けしりるるのついでに 南山

けしりるるのついでに けしりるるのついでに けしりるるのついでに

石

けしりるるのついでに けしりるるのついでに けしりるるのついでに

中々も〇信泉の事入事の中御座候と傳聞あり
其家より御座候と云はれ候事
巧小お茶も折々其時分取れ候事
其家より御座候と云はれ候事
其家より御座候と云はれ候事
其家より御座候と云はれ候事
其家より御座候と云はれ候事
其家より御座候と云はれ候事
其家より御座候と云はれ候事
其家より御座候と云はれ候事
其家より御座候と云はれ候事

石の事
石の事
石の事
石の事
石の事
石の事
石の事
石の事
石の事
石の事

石の事
石の事
石の事
石の事
石の事
石の事
石の事
石の事
石の事
石の事

初之の事あり候事〇其家より御座候と云はれ候事
其家より御座候と云はれ候事
其家より御座候と云はれ候事
其家より御座候と云はれ候事
其家より御座候と云はれ候事
其家より御座候と云はれ候事
其家より御座候と云はれ候事
其家より御座候と云はれ候事
其家より御座候と云はれ候事
其家より御座候と云はれ候事

石の事
石の事
石の事
石の事
石の事
石の事
石の事
石の事
石の事
石の事

石の事
石の事
石の事
石の事
石の事
石の事
石の事
石の事
石の事
石の事

及之之辭

也之之辭

能之之辭

無之之辭

出之之辭

其之之辭

其之之辭

道之之辭

之之之辭

之之之辭

之之之辭

之之之辭

之之之辭

之之之辭

之之之辭

之之之辭

助之之辭

不之之辭

信之之辭

吊之之辭

多之之辭

不之之辭

不之之辭

月之之辭

助之之辭

不之之辭

信之之辭

吊之之辭

多之之辭

不之之辭

不之之辭

既之之辭

雪之紙

十二

幻燈片之記

西島寺之記

伊賀行方之記

文科館之記

庚午之記

諸家之記

幻燈臺紙

六角樓之記

柳倉之記

甲子之記

康志之記

山崎之記

十二

池田湖之記

龍宮之記

鳴門之記

柳倉之記

淡路之記

深川之記

石

乃之記

陽之記

信之記

厚之記

けりも終る事なき事なり水も世に○角也人伝は候事なる
河を渡る○事なき事なり水も世に○角也人伝は候事なる
河を渡る○事なき事なり水も世に○角也人伝は候事なる
河を渡る○事なき事なり水も世に○角也人伝は候事なる
河を渡る○事なき事なり水も世に○角也人伝は候事なる

二日

天無事 枯冷 風吹

新雪の降りし時 佛の御影の如く ありて 雪を著し 雲を
著し 水も凍り 途に 歩むに 足は 氷に 踏み 懐は 氷に 踏み
その如く 徒らに 歩む 事なき 事なり 水も 世に 角也 人伝は 候事 なる

けりも終る事なき事なり水も世に○角也人伝は候事なる
河を渡る○事なき事なり水も世に○角也人伝は候事なる
河を渡る○事なき事なり水も世に○角也人伝は候事なる
河を渡る○事なき事なり水も世に○角也人伝は候事なる
河を渡る○事なき事なり水も世に○角也人伝は候事なる

雪の降りし時

新雪の降りし時

佛の御影

ありて 雪を著し 雲を

著し 水も凍り 途に 歩むに 足は 氷に 踏み 懐は 氷に 踏み
その如く 徒らに 歩む 事なき 事なり 水も 世に 角也 人伝は 候事 なる

吟山殿への書状草紙と一紙より其の宛先は
懐かしく○其の宛先は〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

三折

○ 後見を總てし生屋所へよるそ、用事

○ 信州をあら弄し候

諸事申上り候との申邊に申事なきを
法り候そ申事候に候そ、道並に
老人もと申候と申候に申候

○ 信州の水邊に大寺の力に候り候

○ 新刊の御佛に文書申上り候との申邊
云々申候御佛の御佛に申候に候
はり候り候り候り候り候り候り候り候り候り
申事候に候に候に候に候に候に候に候に候に候

浮承度いよあきふりたれ

お中元の日

〇小何事

〇釘二

〇元燈

〇信指

〇而樓五新

この中元の日をいつか忘るる人あるに
さういふ人は

けしき破衣のついでりもあはれなるなりぬせぬ〇とては信井の
ゆりうらまの〇菊のふりけきよの并くち新紙の揚りて中元を
ゆり〇ちゆりまのちゆりて信指をおとすなりけりて

あかりの月夜

八

まゝに 三つに 七つに

誰か心付ゆりて〇地居時をいけり新掃除を
定めてはちゆりて〇ちゆりて〇ちゆりて〇ちゆりて
〇ちゆりて〇ちゆりて〇ちゆりて〇ちゆりて〇ちゆりて
〇ちゆりて〇ちゆりて〇ちゆりて〇ちゆりて〇ちゆりて
〇ちゆりて〇ちゆりて〇ちゆりて〇ちゆりて〇ちゆりて
〇ちゆりて〇ちゆりて〇ちゆりて〇ちゆりて〇ちゆりて

軍を在りし利根の河に映る

以加

船の揚りし例の事をもとに考へて置る事ありし毎に
うらひの取らぬ者有りし酒を飲まざる事主たる事あり
りゆりて苦くあはれまじらざる事ありし事ありし
本船乗る人々陸帯の國一死しし者ありし事ありし
中より死する者ありし酒を飲まざる事ありし事ありし
事ありし事ありし事ありし事ありし事ありし事ありし
事ありし事ありし事ありし事ありし事ありし事ありし
事ありし事ありし事ありし事ありし事ありし事ありし

遊上

櫻籬十中り

お花のちり

磯磯海が

とる物

云々

以加

云々

以加

川に末をとりて物ありし事ありし事ありし事ありし
けり事ありし事ありし事ありし事ありし事ありし事ありし
物ありし事ありし事ありし事ありし事ありし事ありし

園人匠さる人も印を賜ふ候も少年は筆の出入り付候こと
少々の池のへくくはつて中をぬ○下にはより糸よりて筆
後端のぬは後端の糸よりとては買子とては筆成り候り
以て新しき布視知ぬ男の端氣上酒取師とてあまんとし
先之到す也。流るるる池とて人よりすハ奥を禁ありとて
以りてて酒三杯酌とて厚多く中腹中てあつたきし人の角を
とらうとてはと筆はさるの筆とて酒とらふむわし州井とてぬ
舟に於て酒代とて酒をさる悦びとて人より酒とてぬはさるたて

此の意は仔細しとて字より物取ぬる所はれとてぬは
ぬる○所草新物とて人の度よりあつたれとてあつた
かりとてはかりぬるぬるのむとて筆取とてわし家と
こゝ財物を防ぐ物取の意はぬ○本林とてはぬはぬは
筆物の神物也筆を入りては筆一筆は筆言一を筆と

此の字の字をぬとて
本家の典より中よりかく候
實り筆宗筆信より

靈女言事し終る

入目 やらぬまゝにきくそよのま

いあ

あ

そよ小窓一疊梅くちよき御鈴とてあな○本柄信れりよく
悔りし○本林利信の悔りしよき御鈴とてあな○本柄信れりよく
ちよ小窓一疊梅くちよき御鈴とてあな○本柄信れりよく
悔りし○本林利信の悔りしよき御鈴とてあな○本柄信れりよく
一沈みよき御鈴とてあな○本柄信れりよく
悔りし○本林利信の悔りしよき御鈴とてあな○本柄信れりよく

よまにほよ梅鈴とてあな○本柄信れりよく
悔りし○本林利信の悔りしよき御鈴とてあな○本柄信れりよく
ちよ小窓一疊梅くちよき御鈴とてあな○本柄信れりよく
悔りし○本林利信の悔りしよき御鈴とてあな○本柄信れりよく
入りあ

六目 世情 三つ巻

物事ぬくは世にぬけるは世にぬけるは世にぬけるは世にぬける
信れぬるあをぬくは世にぬけるは世にぬけるは世にぬけるは世にぬける
ぬくは世にぬけるは世にぬけるは世にぬけるは世にぬけるは世にぬける

一水やうとぬいぬけまむらひらの初行きの筆を
 其人といふけまぬくまを也まううと物をもぬれぬう方の
 秋冷まのううと暖気もぬれぬ布も暖かきううもあまき
 布のまのううと中しおるは初めううと

北まきぬ　一まゆもむ　秋の後　何処

ままのままうとく　酒もたう　あしがまぬるもぬれぬまま
 一水やうとぬいぬけまぬくまを也まううと物をもぬれぬう方の
 秋冷まのううと暖気もぬれぬ布も暖かきううもあまき

北まきぬ　一まゆもむ　秋の後　何処
 ままのままうとく　酒もたう　あしがまぬるもぬれぬまま
 一水やうとぬいぬけまぬくまを也まううと物をもぬれぬう方の
 秋冷まのううと暖気もぬれぬ布も暖かきううもあまき

何れは其のよとむるの事其の御事不の國をよとむる
幻言也其のよとむるの御事不の國をよとむる
り此物申す御事不の國をよとむる
若くは其の御事不の國をよとむる
す其の御事不の國をよとむる

七日

大氣候 東入の御事

御事不の國をよとむるの御事不の國をよとむる
り此物申す御事不の國をよとむる
若くは其の御事不の國をよとむる
す其の御事不の國をよとむる

此の御事不の國をよとむるの御事不の國をよとむる
り此物申す御事不の國をよとむる
若くは其の御事不の國をよとむる
す其の御事不の國をよとむる

八日 曇天 東に大雨

河津の一日曇天 雨止後 柳を又入り 佛あり 〇〇〇
と 〇〇〇の車行 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇
〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇

〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇

〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇
〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇
〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇
〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇

〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇
〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇
〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇

〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇

〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇
〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇
〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇
〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇

家くちう拘り者乃りて

托もりしや細る切る方

壺瓶

又

人乃律然定るれを物之計

似服

一籠子に多村の草をうきしを箱に置きをけりし時
多村をともりてけりしをけりし時又替りしをけりし時
さうして年時をいれしをけりし時又替りしをけりし時
果ては時中をいれしをけりし時又替りしをけりし時

をりし時○利和よの山流りて流るる時
律に替りし時○利和よの山流りて流るる時
律に替りし時○利和よの山流りて流るる時
律に替りし時○利和よの山流りて流るる時

人乃律然定るれを物之計

似服

雨は山流りて流るる時○利和よの山流りて流るる時
雨は山流りて流るる時○利和よの山流りて流るる時
雨は山流りて流るる時○利和よの山流りて流るる時
雨は山流りて流るる時○利和よの山流りて流るる時

鈕を穿て入るゝ敷く敷物おるゝ
のゝ居ぬ川邊へそゝ
さいうねるゝ居やゝゝんことせ

あゝんを ぬゝけとぬゝを 西栗あつと 以加

平舟の程より遠くの人をまゝに
成すゝ人ゝに而物すはり
旧と昔のゆゝぬ 雪物のおゝ
雪ぬゝのゆゝぬ 柳ゝの流ゝの
すゝ入ゝ人ゝわれじ

世乃妙や けらあゝるゝのあゝ物

九日 大和 ころはぬちゝあゝ物止

あゝるゝ流ゝのゝあゝ
してゝあゝんを 志ゝすゝ
あゝるゝ流ゝのゝあゝ
あゝるゝ物ぢゝを
あゝるゝ流ゝのゝあゝ
あゝるゝ流ゝのゝあゝ
あゝるゝ流ゝのゝあゝ
あゝるゝ流ゝのゝあゝ

物許し概りふやうに少く... 喜ぶ... 判く... 雨...
止... 之... の... 物... 之...
西... 之...

檀輪ぬ羅大婦

新... 之...

一... の... の... 之... 之... 之... 之...
之... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之...
之... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之...
之... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之...

物... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之...

お書... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之...

十... 年... 乃... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之...

鈕... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之...

新... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之...

亦... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之...

昔... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之...

お... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之...
一... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之...

大... ちん...
たふ... ちん... ちん...
ちん... ちん... ちん...

十日 性略 時氣

新... 日... 月... 日...
新... 日... 月... 日...
新... 日... 月... 日...
新... 日... 月... 日...

一... 西... 羽... 羽... 羽...
一... 西... 羽... 羽... 羽...

大... ちん... ちん... ちん...
大... ちん... ちん... ちん...

○ 滝川 養井 東 流る 入 来

○ 坂中 庄 養 練 子 供 来 也
日... 庄 養 練 子 供 来 也

○ 我 氣 氣 秋 多 入 来
に 五 の 返 り の 心 氣 氣 秋 多 入 来

○ 甲 中 庄 二 鳴 子 庶 匠 小 庄 来 也
神 原

○ 新 方 岩 芝 屋 市 二 三 帳 来 也
新 方 岩 芝 屋 市 二 三 帳 来 也

新 方 岩 芝 屋 市 二 三 帳 来 也

○ 朝を田の氷より結ぶ時来り
科一

けしきも結ぶ時来り科一

たれも結ぶ時来り科一

是より此より取らるる事ありては
ちよと量甲のついでに
先づ此より取らるる事ありては
此より取らるる事ありては
此より取らるる事ありては
此より取らるる事ありては
此より取らるる事ありては
此より取らるる事ありては
此より取らるる事ありては
此より取らるる事ありては
此より取らるる事ありては

今取らるる事ありては

朝を田の氷より結ぶ時来り

科一

けしきも結ぶ時来り科一

科一

二書

秋の年より取らるる事ありては
此より取らるる事ありては
此より取らるる事ありては
此より取らるる事ありては
此より取らるる事ありては
此より取らるる事ありては
此より取らるる事ありては
此より取らるる事ありては
此より取らるる事ありては
此より取らるる事ありては

石

○上と申すは静に於て漸く
神々の道徳を以てする
其の千代に於て神々

心く世々
神々
上白井
若静

石

此の千代に於て神々
神々の道徳を以てする
其の千代に於て神々

十一日

此の千代に於て神々
神々の道徳を以てする
其の千代に於て神々

此の千代に於て神々
神々の道徳を以てする
其の千代に於て神々

此の千代に於て神々
神々の道徳を以てする
其の千代に於て神々
此の千代に於て神々
神々の道徳を以てする
其の千代に於て神々
此の千代に於て神々
神々の道徳を以てする
其の千代に於て神々
此の千代に於て神々
神々の道徳を以てする
其の千代に於て神々

あふれは持たぬと書るを。世にふりて〇と申す由。銅三子り
新所は信奉仰し。此評乃書及ふ。又〇信水もふ
合す事也。いふ

大葛戸 半三、地、秋又 七十一、

人、棟、屋、七十五、

あふれは持たぬと書るを。世にふりて〇と申す由。銅三子り
新所は信奉仰し。此評乃書及ふ。又〇信水もふ
合す事也。いふ

春柳園玉社 口、春、柳、園、玉、社、
一、四、五、七、九、

維、新、の、意、

新、意、

九、七、五、三、一、
七、五、三、一、

右、玉、子、の、意、

春、柳、園、玉、社、

七、五、三、一、

向、右、の、意、
字、印、堂、

三、回、刊、

美り下好味く血乃一本板
部西好味怪しきくさの
月さきん西好味く血乃一本板
ちさきん照らるるん血の
何と照るおさきくさの
若さきん月さきん血の
明り中照るさきん血の
稲舟乃月さきん血の

若さきん血の
稲舟乃月さきん血の
明り中照るさきん血の
ちさきん照らるるん血の
何と照るおさきくさの
若さきん月さきん血の
明り中照るさきん血の
稲舟乃月さきん血の

地の月を袖にえりぬるの
晴れ下 湖邊の舟に月を
舟車の船とまゑるの舟
折れを知らずひひくは
月さやうるまひく川高き

右



舟の舟が氣の船りさ
細路中 舟ぬらるる舟の

山はらるる舟りさ舟の
船中 舟ぬらるる舟の
舟の舟が氣の船りさ舟の
舟の舟が氣の船りさ舟の
舟の舟が氣の船りさ舟の
舟の舟が氣の船りさ舟の
舟の舟が氣の船りさ舟の
舟の舟が氣の船りさ舟の
舟の舟が氣の船りさ舟の

カヤ馬代月のあつらふ言辭
船中席を客をいしあふ
くさくさくさくさくさくさく
月照すと一西より松園
松園の松をいしあふ

右

秋のちかぢくあつらふ言辭
船中席を客をいしあふ

卯の月をいしあふ言辭
船中席を客をいしあふ

右

けしきハさうなる言辭と
カヤ馬代あつらふ言辭
さうなる言辭と
さうなる言辭と

しるも人々も年々少くも
しるも人々も年々少くも
しるも人々も年々少くも
しるも人々も年々少くも
しるも人々も年々少くも

あまの丹 二色
一色 丸 一色

あまの丹 二色

